

は し が き

本訳書は、現代平和学の方法の開発におけるパイオニアであり、世界の平和運動のリーダーとしても知られる、ヨハン・ガルトゥング (1930-) の5つの代表的な論文・エッセイから構成される。それらは、次の通りである。¹⁾

- 1 「積極的平和とは何か」(2015)
- 2 「暴力・平和・平和研究」(1969)
- 3 「文化的暴力」(1990)
- 4 「革命の構造的理論」(1974)
- 5 「生き方としてのコンフリクト」(1969)

これらをなぜ選んだのかは巻末の「解題」で述べよう。まずは、ノルウェー出身のヨハン・ガルトゥングとはどういう人か。このことを多少とも知るために、彼の青少年時代のエピソードをいくつか記しておこう。²⁾

1940年4月、ナチ政体に賛同する緑の制服を着たドイツ兵がオスロの街路を行進した。市民社会はドイツ人の手にわたったのだ。彼の父親(ノルウェー陸軍の少尉であり、また医者であった)は、オスロ近くの強制収容所に連行された。毎日曜日、冬はスキーを履いて、収容所を見おろす場所に彼は行った。「眼下には、黒い服をまとった何百、何千という囚人がいた。手に銃を持って見張るドイツ人の警備隊員が、緑の制服で1人ポツンと立っていた。黒い点々の1つが父なのだ」(さいわい父は帰還することができた)。1948年1月、ガンディーの死に際して、「世界中の人々が泣いた——こう言って赦されるならば、ノルウェーの17歳になる1人の少年をも含めて」。1951年、良心的兵役拒否者 (conscientious objector to military service) としての承認を求める法務省への書簡の末尾に、「私は生涯を平和研究に捧げたい」と書いた——それ(平和研究)が本当に何を意味するかほとんどわからないままに。これがすべての始まりであった。しかし、

何のための兵役か？ 仮想敵国「ソ連」のためか？ 答を見出すチャンスは1953年に訪れた。西側初の学生代表团に参加、ソ連に行った（滞在中にスターリンが死んだ）。世界を構成する唯一目に見えるのは、国民国家とそのシステムであった。しかし、これは「狂っている」。だから、「歴史からひどく扱われた魅力的な人々」は皆、「ソビエト連邦」に還元されたのだった——「それで終わり。狂っているよりひどい。実にくだらない」。1950年代は、学位取得のため数学と社会学を専攻、「集団や社会は個人の総和以上のものであるとのデュルケームの見方に私は魅せられた」。1957～60年、コロンビア大学のリサーチ・スカラーとして、3人の社会学者（理論社会学者・数理社会学者・応用社会学者）に師事、「毎日が喜びであった」。1962年、本当のチャンスがやってきた。オスロ国際平和研究所（PRIO）が創設されたのだ。「平和が国際的・学際的方法で研究可能だという見方が通った」のであった。そして、これ以後は、現在のガルトゥングにまで一直線に繋がっているであろう。

その間、平和に関する150冊の書物、1500本の論文——要するに膨大な量のテキスト——が書かれた。そのテーマは、平和研究、平和教育、平和行動、平和と戦争、防衛、平和と社会構造、平和と世界構造、平和の諸問題（ケース・スタディ）、方法論とイデオロギー、方法論と開発など、多岐にわたる。しかし、こうした研究対象の拡散と同時に、他方において、体系化への志向が一貫して強烈に働いていることは注目されてよい。たとえば「エントロピーと平和の一般理論」（1968）と題する論稿が、「ガルトゥング平和学」生誕の初発において、すでに書かれていた。³⁾それは、平和概念の地平を飛躍的に拡大したものの、結論は過度に一般的であり、実践には無力であったろう。ゆえにそれ以後、より実体的な理論の構築が求められたと言えよう。そしてそれは、主として暴力概念の彫琢によって実現されることになった。

現時点において、ガルトゥングの平和理論を体系的に示す代表的な著作として、次のものが挙げられよう。⁴⁾

- ① 『平和的手段による平和——平和・紛争および開発・文明』（1996）
- ② 『紛争の理論——直接的暴力を克服する』（2010）

- ③ 『開発の理論——構造的暴力を克服する』(2010)
- ④ 『平和の理論——直接的・構造的・文化的平和の構築』(2013)
- ⑤ 『文明の理論——文化的暴力を克服する』(2014)
- ⑥ 『深層文化・深層構造・深層自然——平和理論と平和行動の3つの柱』(2017)
- ⑦ 『平和数学——平和の、平和による、平和のための数学』(2012)

①の『平和的手段による平和』は、ガルトゥング平和学の体系化が企てられた最初のまとまった著作として重要である。②～⑤は4部作として、理論の細部にわたって彫琢がほどこされ、これによってガルトゥング平和学の全貌が文字通り姿を現したと言えよう。しかし、ここにとどまらず、⑥によって理論のいっそうの深化が図られている。⑦は数理科学者ディートリヒ・フィッシャー(1941-2015)との共著で、ガルトゥングの平和理論の数学的補遺である。これらの著作は、われわれが平和を理論的・実践的に探究するとき、必ず参照すべき宝庫であるに違いない。しかし、その本格的な研究はすべて今後の課題である。

現在、ガルトゥング著『日本人のための平和論⁵⁾』(2017)が広く読まれている。この本を手にする読者の大半はおそらく専ら時論的な関心からであろう。しかし、そうした時論の根底にある基礎理論をさらに知ろうとするまでには、読者の関心は深まっていないようだ。しかし同時に、それ(基礎理論)を希求する知的欲求も確実にあるように感じられる。

こうした状況において、本訳書を出版する意義は何か。あるいは、誰にこれを読ませたいのか。もちろん、平和(学)に関心をもつ高校生・大学生・大学院生・研究者に、であることは言うまでもない。しかし、編訳者として私は、誰よりもこの本を、一般市民にこそ読んでもらいたいと思う。

ガルトゥングの論文・エッセイ——本になった体系化された著作ではなく——の特徴・特長は、著者の思考の流れ・スタイルが率直にそのまま表現されていることである。ゆえに、彼の論文・エッセイを精読することにより、読者はその思考の流れに自然に導かれ、表現された内容を深くかつ納得的に理解することができる。私は、一般の市民にこそ、そうした社会科学的思考そのも

のを、体験・味読してもらいたいのだ。内容に賛成か反対かとはそれは別次元のことである。

こうして、「平和とは何か？」の問いへの知的好奇心が社会の深部に旺盛に遊動してあるならば、大学生・大学院生・研究者による平和学およびそれに関連する諸分野の専門的研究が、一般社会との相互関係において、真に生きたものになるに相違ないからである。

平和の探求が社会科学の1つのディシプリンとして成立し得ることを私はガルトゥング平和学との遭遇によって知ることができた。その進化・深化のダイナミックな過程のいくつかの断面を示す本訳書が、平和への強い関心を喚起することを通じて、ゆくりなく、読者を平和研究(ピース・リサーチ)そのものへと誘うことができれば幸いである。

最後に、かなり長期にわたった翻訳の過程において、つねに訳者の士気を鼓舞してくださったトランセンド研究会の諸氏、日本の政治的現況において、ガルトゥング平和学の重要性を認め、本訳書の出版を決断された法律文化社の小西英央氏、これらの方々に深い感謝の意を表したい。

2019年7月

藤田 明史

1) 翻訳に当たって各論文のテキストとして次のものを用いた。

①Johan Galtung, Positive Peace—What Is That?, *TRANSCEND MEDIA SERVICE*, 5 January 2015.

②Johan Galtung, Violence, Peace, and Peace Research, *Journal of Peace Research*, Vol.6, 1969, pp.167-191.

Johan Galtung, Violence, Peace, and Peace Research, *Peace: Research · Education · Action, Essays in Peace Research* Volume I, Christian Ejlertsen, Copenhagen, 1975, pp.109-134, Notes, pp.384-391. (両者には、本文および図の表示に若干の相違があるが、訳者の判断で良いと思われる方を採った)

③Johan Galtung, Cultural Violence, *Journal of Peace Research*, vol.27, no.3, 1990, pp.291-305.

④Johan Galtung, A Structural Theory of Revolution, *Peace and Social Structure*,

Essays in Peace Research Volume III, Christian Ejlers, Copenhagen 1978, pp.268-314, Notes, pp.536-539.

- ⑤Johan Galtung, *Conflict as a Way of Life, Peace and Social Structure, Essays in Peace Research* Volume III, Christian Ejlers, Copenhagen 1978, pp.484-507, Notes, pp.561-564.

なお本文中、強調のためのイタリック体の箇所は、翻訳では強調点を付した。また引用符の箇所は「 」で示した。文意を明確にするため訳者として語句を挿入した箇所は[]で示した。

- 2) 興味あるいくつかのエピソードを次の諸文献から拾った。ヨハン・ガルトゥング「未来がどんな形をとるか」『ガルトゥングの平和理論—グローバル化と平和創造』、木戸衛一・藤田明史・小林公司訳、法律文化社、2006、pp.235-254. Galtung, J., Preface, Dedication, and Introduction: A Short Intellectual Autobiography, *50 Years – 25 Intellectual Landscapes Explored*, Transcend University Press, 2008, pp.7-11. Galtung, J., *THE POLITICAL GANDHI, 60 SPEECHES ON WAR AND PEACE*, PRIO, Oslo, 1990, pp.146-158.
- 3) Johan Galtung, *Entropy and General Theory of Peace, Essays in Peace Research*, Volume I, Ejlers, Copenhagen, 1975, pp.47-75. 本論文は、社会結合的な政策下において、社会の高エントロピーの状態が平和的であるとする。それは「すべての目的に対して最も効率的なシステムでは必ずしもないものの、すべてを破壊する戦争に対する最良かおそらくは唯一の防護であろう。同時に未だ語られていない可能性を人類に開くシステムでもあろう」と結論する。「平和の一般理論」の1モデルとして本論文の価値は現在でも失われていない。藤田明史「ガルトゥング平和学とトランセンズの活動」(日本科学者会議『日本の科学者』Vol.44、2009. 8、pp.24-25)を参照されたい。
- 4) ①*Peace by Peaceful Means—Peace and Conflict, Development and Civilization*, PRIO, 1996. ②*A Theory of Conflict—Overcoming Direct Violence*, TRANSCEND University Press, 2010, ③*A Theory of Development—Overcoming Structural Violence*, TRANSCEND University Press, 2010, ④*A Theory of Peace—Building Direct Structural Cultural Peace*, TRANSCEND University Press, 2013, ⑤*A Theory of Civilization—Overcoming Cultural Violence*, TRANSCEND University Press, 2014, ⑥*Deep Culture, Deep Structure, Deep Nature—Three Pillars of Peace Theory and Peace Practice*, TRANSCEND University Press, 2017, ⑦*Peace Mathematics— Mathematics of, by, and for Peace*, TRANSCEND University Press, 2012.
- 5) ヨハン・ガルトゥング『日本人のための平和論』、御立英史訳、ダイヤモンド社、2017。